

# かささぎ通信 第144号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2025年 2月 14日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

2025年1月の「森三郎の作品を読む会」では、「二人静」(『雪こんこんお寺の柿の木』1943年12月)、「ほたる」(『赤い鳥』1933年11月号)を読みました。

初めに読んだ「二人静(ふたりしずか)」は源九郎義経が兄頼朝の元から西国へ落ちる途中、吉野山までやって来た時の話です。そこまで共に来た静御前を、これ以上は女の足では無理だからと都へ帰すことにします。静御前は別れを惜しみ、我が家に伝わる「初音の鼓」を我が身の代わりに義経に託します。その後、川連法眼の邸に宿をとった義経が、静を想い「初音の鼓」を打っていると、当の静が寂しさに勝てず戻ってきます。その時、またはや玄関に静が現れます。一分一厘も相違ない二人の静を前にして、どちらが本当の静か質そうと白拍子の舞を舞わせても分かりません。今度は「初音の鼓」を打たせてみると、後から来た静が鼓を打ち出した途端、先に来た静の様子が代わり、鼓のそばへかけより泣き崩れます。そして自分は吉野山の狐で、鼓に張られた皮は自分の母親狐の皮だと打ち明けます。

ここまで読んでいるうちに、前回の「鼓大名」の、大名が鼓に珍しい皮を張らせようとする話を引き継いでいるという事が分かりました。しかも歌舞伎の「義経千本桜―川連法眼館の場」を元にしていて、鼓をもった静御前の傍にいます。三郎さんの童話では狐を静かに化けさせています。題名を「二人静」にしていますが、これは静御前の霊が吉野の菜摘み女にのりうつり、二人の静が舞を見せる能「二人静」に拠っているのでしょうか。

三郎さんの作品では「あっぱれだ。見上げたものだ。畜生でありながら親をしたふ心根がいぢらしい」と、義経は「初音の鼓」を狐に与え、自分の名前から「源」をとって「お源狐」の名を与えています。三郎さんの「目ぐすり」(『赤い鳥』1932年3月号)で、目を患っている親狐のために目薬を買いに行く子狐と、子狐の親を思う気持ち

に感じ入って狐親子を助けた七右衛門さんのことが思い浮かびました。「二人静」は狐親子の心情を中心とし、最後には笑いの場面でまとめている点に森三郎作品の特徴が表れています。

これまでもたびたび触れてきましたが、今回の作品からも『雪こんこんお寺の柿の木』所収の作品は古典や能・歌舞伎などを題材にして創作したものが多くという事が分かりました。

次に読んだ『赤い鳥』(1933年11月号)の「ほたる」の主人公は四年生の久子です。女の子が主人公の話では三郎さんは女性名で作品を発表していることが多いのですが、この作品は「森三郎」の名前で発表しています。登場するのは久子と妹、東京のいとこ、近くの町のいとこと、女の子ばかりです。この話は日常のちよつとしたことを話題にしているのですが、同じいところでも親しい気持ちになれるか、なれないかの心理を書き分けているところが特徴です。久子は同年の東京のいとこを気に入っているのですが、東京の人だという憧れもあつたのかもしれない。三郎さんも子どもの頃、東京の人という響きに都会の文化への憧れを感じていたのではないのでしょうか。

この話を読んで当日のメンバーが興味を持ったのは、生活の有様です。麦わらでホタル籠を編んでほたるを飼うなどの経験は誰も持っていませんでしたが、それでも蚊帳の中にほたるを放した経験はあり、蚊帳への入り方など話題は広まりました。妹の富子は村の八幡様のお祭で赤い提燈を買ってもらいますが、提燈のことを「提灯行列」と呼んでいます。刈谷には小さいほうずき提燈の行列の夜祭があり、兄の銚三さんも「ささやかな夜祭」(『明治村通信』1978年1月号)で経験を書いています。「提燈」そのものを「提灯行列」と呼んでいたのは、あるいは末弟の三郎さん自身の経験だったかもしれません。

〈次回予定〉2025年3月14日(金)午後一時半~三時半  
「五年のころ」(『赤い鳥』1933.12) / 「長靴を穿いた太陽」(『雪こんこんお寺の柿の木』1943.12)